

WITH LIFE

共に生きる.....

2019
ウィズライフ
第49号

テーマ

始めませんか、ボランティア



私たちの「願い」

私たちは、公益に資する法人として、

- 「高齢者も障がいのある人も社会で共に暮らし、共に生きることがノーマルである」というノーマライゼーションの理念に基づき、
- 高齢者や障がい者が安全で安心して快適に暮らせる住生活の整備・向上を通して、
- すべての人が生きがいをもって生活できる社会づくりと、社会福祉の増進に寄与することを目的に取り組んでおります。

私たちのこの「願い」のため

尚一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう

心からお願い申し上げます。

公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団

理事長 土屋 公三

WITH LIFE 第49号 目次

特集 始めませんか、ボランティア

- 4 ボランティア活動をしようと思ったら
——札幌市社会福祉協議会ボランティア活動係長 辻 岳さんに聞く
 - 6 事例① 福祉施設
 - 7 事例② 地域活動
 - 8 事例③ 読み聞かせ
 - 9 事例④ 学生ボランティア
 - 10 事例⑤ 動物愛護
 - 11 事例⑥ 移送サービス
-
- 12 明るいフクシ探検記 伊藤千織
ドイツ高齢者福祉視察研修
 - 14 「福祉視察研修」レポート 忍 博次
ドイツの高齢者医療・福祉現場に学ぶ
 - 16 小中学生による「安全・快適アイデア」コンテスト
 - 18 トピックス 札幌わらしべ園苗穂事業所で「もちつき」
 - 19 「ノーマライゼーション住宅財団」活動紹介

2019年4月1日発行

発行人／土屋公三

発行所／公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団©

〒060-0042 札幌市中央区大通西16丁目2-3/ループル16 9F

TEL 011-613-7551 FAX 011-612-8431

URL <http://normalize.or.jp/>

【制作スタッフ】 ●編集協力／株式会社日本商工振興会

●編集総括／奥野 彰 ●取材・文／大藤紀美枝 ●写真／酒井伸一
●レイアウト／高部友恵 ●表紙イラスト／佐藤正人 ●題字／須田照生

【印刷】株式会社須田製版

我らサポーター ⑤

おおさか
大阪

かつひこ
克彦さん (76)

有限会社アイデア代表取締役
北海道デザイン協議会理事・名誉会長
公益財団法人ノーマライゼーション住宅財団理事



大阪さんが1次審査でノミネート作品をしぼり、2次審査は全審査委員がそれぞれ採点し、集計・検討して各賞を決定

子どもたちの優しさや思いやりを募る

小中学生による「安全・快適アイディア」コンテストは、当財団が主催し、すでに23回を数える。

審査委員長を務め全作品に向き合う大阪克彦さんは、「大きな喜びであり、苦行でもあります」と苦笑い。

大阪さんは家具や福祉機器の設計・デザインを行い、

コンテストやコンペティションの入賞実績も豊富。

2016年には札幌文化奨励賞を受賞した。

多くの作品が美術館や図書館など公共施設で使用され、人々と共に年輪を刻んでいる。

「設計図を具現化できた瞬間のうれしさは格別です！」

工作に熱中した少年時代のトキメキは今も健在だ。

だから、思いを同じくする

「安全・快適アイディア」コンテスト応募者の

その後が気になってしょうがない。

「どんな仕事に就いているのだろう。」

モノづくりをしていたら……」

活躍を想像するときの胸の高鳴りも

サポーターならではだ。

写真／酒井伸一
取材・文／大藤紀美枝



審査委員長として最も重視するのは「公正さ」

ボランティアをしようと思ったら

—— 札幌市社会福祉協議会ボランティア活動係長 辻岳つじ たかしさんに聞く

日常にボランティア活動を組み込んで 共に生きる喜びを分かち合おう！

ボランティアは誰にでも、どこでもできること。興味があれば、即行動！

地域が社会が、あなたを待っています。ボランティアを始めるに当たって知っておきたい相談窓口や研修を紹介します。

取材・文／大藤紀美枝

ボランティア活動へいざなう相談窓口

核家族化、少子高齢化が進むにつれ、家族で解決できない問題、公的サービスでは対応しきれない事柄が増えていきます。人と人の支え合いなくして、安全・安心、楽しみの多い暮らしは望めませんが、「人間関係が希薄になった」と言われて久しい今日、期待されるのは地域住民の支え合いであり、ボランティアの活躍です。

札幌市社会福祉協議会ボラ

ンティア活動係長・辻岳さんは、「ボランティアに関心のある方が増えているのは確か」と言い、「ただ、どう貢献したらよいのか、またどう参加したらよいのかわからず、一歩踏み出せないでいる方が少なくない」とも。

同社協ボランティア活動センターでは、各区社会福祉協議会と連携を図りながら、ボランティアの相談および登録、需給調整、団体の活動紹介などを行っており、



ボランティア活動センターの役割について語る辻岳係長

開放的な相談窓口は「気軽に足を運べる」と好評です。「ボランティア活動は自分の意志・考えに基づく活動です。ですから、ボランティアを始めようという方の相談を承るに当たって、ご本人の希望を尊重し、いつ、どこで、どんなボランティアを希望しているのか整理し、ご本人が抱いているイメージを具体化していきます」と辻さん。

一定期間参加できるのであるれば、グループ活動や施設での活動などがありますし、単

発希望であれば、イベントや行事協力などに参加する方法があります。

活動場所は家庭・地域、福祉施設、学校・職場など、ありとあらゆる場所。そこで高齢者や障がい児・者と関わる活動（見守り、話し相手、家事援助、外出介助など）や子どもと関わる活動（学習のサポート、引きこもりのサポート、絵本の読み聞かせなど）もあれば、特技を生かす活動（楽器演奏、書道、パソコンなど）も。まちの美化、リサイクルに関する活動もあります。

ボランティア活動は基本的に無償ですが、交通費などが支払われることもあります。また、地域や会員相互で支え合う有償ボランティア事業（サービス内容により活動費を支給）を行っている社会福

祉法人やNPO法人もあります。

知識や技術を習得する各種研修に注目！

社会福祉協議会などでは、ボランティアのための研修会を開催しています。ジャンルは多彩、有料の研修もあれば、無料の研修もあります。

「当活動センターが実施している『1日福祉セミナー』（有料）では、地域福祉のトレンドとその取り組みについて学んでいただこうと、ヘルプマーク、発達障がい、子ども食堂、終の棲家などを各回のテーマとして、それぞれの専門家を招いて研修を行っています。

また、傾聴、朗読、手話など、ボランティアとして関わるに当たって技術を身に着けたい方のための講座、地域活動に関心のある方のための講座、福祉の現場の体験講座や出張講座も用意しています。ボランティア入門の方からスキルアップを目指す方まで、経験の有無にかかわらずどなたでも参加可能です」と辻さんは研修会への参加を勧めます。

いろいろある中から選んで参加 札幌市社会福祉協議会ボランティア活動センターの研修例(1講習2時間程度)

福祉啓発系

- 1日福祉セミナー〔全9回〕(有料)
- 認知症サポーター養成講座〔全12回〕(無料)
- 生涯現役セミナー(有料) など

地域活動系

- 社会的孤立を考える研修〔高齢者編、家族編、若者編、障がい者編〕(有料)
- 地域見守りサポーター養成研修〔全4回〕(無料)
- 災害時のための地域支え合い講座(無料) など

- 1.福祉のトレンドに触れて学ぶ「1日福祉セミナー」
- 2.体験しながら学ぶ「ガイドヘルプ研修(車いす介助編)」
- 3.障がい者スポーツでのボランティア活動の様子



ボランティア研修系

- はじめてのボランティア講座〔全5回〕(無料)
- シニア世代のためのボランティア研修〔入門編、地域活動編〕(有料)
- ガイドヘルプ研修〔車いす介助編、視覚障がい手引き編、知的障がいコミュニケーション編〕(有料) など

登録ボランティア系

- 介護サポーター研修〔全12回:内2回は出張版〕(無料)
- 地域支え合い有償ボランティア事業協力会員登録説明会・活動前研修〔全12回:内2回は出張版〕(無料) など

退職後のシニア男性も
ボランティアで活躍を

さて、地域活動やボランティア活動においても、退職後のシニア男性の活躍が大いに期待される場所です。しかし、同活動センターに相談に訪れる人の男女比を見ても、まだまだ女性の割合が多いのが実情。そこで、辻さんにシニア男性のボランティア活動のきっかけづくりのポイントを伺うと――

「ご自分の得意なこと・関心のあることを洗い出してみてください。企画力がある、ネットワークを持っている、パソコンが得意だ、イベントに携わってみたい……。そうした能力・意欲を生かせる場の一例として、NPO 運営のお手伝いや福祉関係イベントの企画・運営などが挙げられます。男性の場合、組織だったところでの活動が「しつくりくる」と感じる方も多いのでは」とのこと。

一定の責任を伴う役割を任せられることによって、やる気に火がつき、主体性、創造性が発揮されるのは言うまでもありません。それはシニア男性に限らず、誰にも当てはまることです。

心に響いたら
始めどき

ボランティア活動をする上で、さまざまな人間関係が生まれます。時に、捉え方の違いなどにより摩擦が起きたり、悩みの種が芽生えることがあるかもしれません。社会福祉協議会ボランティア活動センターのような支援機関は、ボランティア活動中の相談も受け付け、一緒に問題解決の道を探ってくれます。

「例えば、福祉施設でボランティアをしていて、利用者さんに個人的な相談を持ちかけられたとします。約束や秘密を守るのは鉄則ですが、困ったときは、所属する組織のメンバーあるいは活動を介してくれた機関に相談し、悩みを一人で抱え込まないこと」と辻さんはアドバイスします。

「安心」という点において、もう一つ準備したいのが、「ボランティア活動保険」への加入。「ボランティア活動中に転んでけがをした」「ボランティア活動中に訪問先の物を壊してしまった」など、万一のときの備えは欠かせません(一人当たりの年間保険料は300円から。詳細は、最寄

りの社会福祉協議会に問い合わせを)。

「ボランティア情報は、いわば『生もの』です。ですから私も、正しい情報を素早く発信できるよう心掛けています。チラシなど印刷物を掲示・配布するとともに、ホームページにもアップしていただきますから、ぜひ活用ください」と辻さん。

世の中で何が必要とされているのか知って、考え、そして行動する。ボランティア活動は、心のアンテナにピンときたときが始めどきです。

社会福祉法人札幌市社会福祉協議会
ボランティア活動センター

札幌市社会福祉総合センター4階
札幌市中央区大通西19丁目1-1
TEL.011-623-4000 FAX.011-623-0004
E-メール vc@sapporo-shakyo.or.jp

◎ボランティア相談の受付時間
8時45分～17時15分(月～金、※土・日・祝・年末年始は休業)
※札幌市各区社会福祉協議会の相談窓口も同様。

ボランティア活動事例① 福祉施設

特養のシーツ交換16年 そのきっかけと長続きの秘けつは…

60代半ばで 一念発起

ボランティアの心得の一つとして、「細く長く無理をせず続けること」が挙げられます。60代半ばからボランティア活動を始め、16年間続けている吉田千代子さんと片山宏子さんに、取り組みの内容と長続きの秘けつを伺いました。



吉田千代子さん

場所は、特別養護老人ホーム藤苑（以下、藤苑）のボランティアルーム。東区に住む吉田さんは徒歩で、中央区に住む片山さんはバスを乗り継いで通っています。

まずは、ボランティアを始めたきっかけから。「退職後、東区の年輪大学（高齢者対象の教養講座）に通い、自宅から歩いて行ける範囲でできることを探していたとき、藤苑さんがボランティアを募集し、平成15年1月に講習会を開くという新聞記事を読んだんです」と吉田さん。「私はボラナビ（ボランティア情報誌）で知りました。当時、施設のボランティア募集も講習会も珍しかったから興味がわきました」と片山さん。



片山宏子さん

参加したボランティア講習会で、体におもりを装着して不自由さを体験するとともに、お年寄りへの接し方や車いす介助について学んだ二人は、ボランティアサークルの設立に賛同。みんなで「ひよこの会」（初心者が集まりの意）と名付け、活動をスタートさせました。

同会のモットーにのっとり、吉田さんは月曜日は特養のシーツ交換、火曜日はグループホームで食事の後片付けなどをし、土曜日に藤苑の催しがあるときは、その手伝いも。片山さんは月曜日は特養のシーツ交換、金曜日はデイサービスの場で、話し相手やゲームの盛り上げ役を手伝っています。

人との出会い・交流が 活動の大きな励み

「シーツ交換は肉体労働。汗だくになるけど、それがよくてやっています」と口をそろえる吉田さんと片山さん。二人に付いて、利用者がおやつタイムなどでベッドから離れている居室へ向かう途中、廊下でも食堂でも利用者、職員、ボランティアを問わず「おはようございます」「いつもありがとうございます」と、明るく声を掛け合い、ときには手と手のハイタッチも。ボランティアルームで片山さん

●札幌市在住

よしだ ちよこ
吉田千代子さん(81)

かたやま ひろこ
片山宏子さん(80)



手際よくシーツ交換をしていく吉田さんと片山さん

んが「職員さんはじめ、みんな人間ができているから、雰囲気いいですよ」と語り、吉田さんが「声掛けにも、対応にも優しさがあふれています」と語ったとおりの光景です。

二人は、利用者のベッドサイドに着くや否や、あ・うんの呼吸で掛け布団、タオルケット、シーツとはがし、クリーニング済みのシーツを広げて、手際よく四隅を整えていきます。その日のシーツ交換に要する時間は、集まった人数と状況次第。朝9時からスタートして

2時間ほどの作業です。

ボランティアを始めようとしている人へのアドバイスとして、片山さんは「福祉施設でボランティアをしていると、自分が年をとったとき、何をしてもらいたいかかわるので、お勧めです」と言い、「長続きの秘けつは、やる気とよい環境、よい仲間との出会い」とも。

一方、吉田さんは、「させていたでいるという謙虚な気持ちがあれば、長く続くと思います」と言い、「引つ込み思案だったんですが、ボランティアをして変わりました」とも。

ひよこの会は藤苑の行事にも参加しており、文化祭で「金色夜叉」を上演した際、吉田さんはお宮を熱演。そうした思い出話も掛け替えのない宝物となっています。

ボランティアサークル ひよこの会

現在、メンバーは約10人。参加希望者は電話の上、見学を!

◎事務局:社会福祉法人伏古福祉会
「特別養護老人ホーム藤苑」内
札幌市東区伏古7条3丁目1-33
TEL.011-781-2400

地域の実情を把握して助け合い 自然にさりげなく見守り活動

年金生活を機に 町内会活動へ

2003年に漁業関係の金融機関を60歳で定年退職して再就職。その後、65歳で年金生活となった札幌市在住の山田耕三さんは、セカンドステージで手にした自由時間の使い方を考える間もなく、町内会とマンション管理組合から声が掛かり役員を務めることになりました。

通した対策を講じなければと思いました。他の町内会がどう対応しているか知りたくて、まず豊平区社会福祉協議会を訪ねました」と山田さん。

そこで自身が暮らす西岡地区は38町内会で町内会連合会（以下、町連）を形成していること、市社協、区社協に続く地区社協があること、そして地区社協ごとに福祉のまち推進センター（略称：福まち）（※1）があることを知り、地域活動に関する勉強の必要性を痛感したそう。

「私のところは一つのマンションで一つの町内会を組織しています。築年数が経つほどに住人の高齢化が進み、先々を見



福まち事務室で広報の編集作業をする山田耕三さん

うちに、町内会副会長兼交流推進部長になり、福まちの福祉推進員になり、町連の役員になっていました」

そう語る山田さんは、町内会においては年数回、趣向を凝らした「ふれあいの広場」を企画。町内会長と共に月1回、一人暮らしの高齢者（70歳以上）宅を訪問して「お変わりありませんか」と声を掛け、談笑しながら有益な情報



町内会長（中央）と共に一人暮らしの高齢宅を訪ね語る山田さん

を提供。また、福まちや町連の広報誌の編集にも携わり、締め切りが重なるパソコンに向かう日が続きます。

家族と仲間の存在が 活動の支えに

さまざま地域活動でネットワークを広げる山田さん。頭の中には予定がぎっしり詰まっています。

月々金曜日の午前中は、自宅から徒歩5分、にしおか会館内にある福まち事務室・相談室へ。月6〜7回はスクールガード（※2）で早朝に西岡北小学校近くのT字路に立って登校する児童を見守り、

札幌市在住
やまだ
山田 耕三さん(75)

午後は町内会活動や町連関係の活動を入れるも、おむね自由時間とのこと。

そうした中で、

山田さんら地域の福祉活動に勤しむ人は、西岡地区の高齢化率が30%を超えているという状況を踏まえ、「相手の方が負担を感じないように、自然にさりげなく心を掛け、見守り、サポートの充実を」との思いを強めているそう。

何事にも腰を入れて取り組む山田さんですが、「遊ぶのが好き」と公言し、カラオケ、マーじゃん、飲み会の時間を確保。家庭においては食事や語らいを大事にし、ごみステーションへのごみ出しを含む家事の一部を担当しています。

「私がこうして地域活動を続けられてるのは、家族の理解と共通認識を持つボラン



スクールガードとしてT字路に立ち、児童の交通安全に心を配る

ティア仲間がいるから。福まちの事務室には常に3〜4人来ていて、身内の介護のことなども話題に上ります。お互いのことがよくわかっているから、何かあった時は快く業務を代行し助け合っています」

山田さんが強調する共通認識と信頼関係を築くために、どこに留意すべきか尋ねると、「ボランティア活動は、受け手となる人と、する人、あるいは、する人同士が対等である」と意識して取り組むことが必要だと思います。また、懸命になってやり過ぎると他の人の「やる気」をそぐことになりかねません。自分ができるところをして、たまたま地域あるいは人の役に立っているというスタンスがいいんじゃないでしょうか」

山田さんは、実践経験から会得したボランティア活動のコツを的確に語ります。

※1 福祉のまち推進センター…住民による自主的な福祉活動を行う組織。一人暮らしの高齢者、障がいのある人の世帯、子育て中の世帯などを対象に、福祉推進員（町内会長が推薦）による見守りなど日常生活支援活動、高齢者サロン・子育てサロンの開催などを行っている。

※2 スクールガード…市教育委員会に登録。専用ベストなどを着用し、児童の登下校時などに見守り活動を行うボランティア。

ボランティア活動事例③ 読み聞かせ

幼児や児童に読み聞かせ 夕張の子を本好きに！

顔見知りにも声を掛け 奮闘する司書を支援



ゆうばり小学校の図書室に集った「ひなたBOOK」のメンバー（前列左が西田ひろ子さん、その隣が野尻千佳子さん）と工藤麻衣教諭（後列左から2人目）、司書の平井由美子さん（後列右）



手慣れた手つきで黙々と図書整理

「BOOK」と記して「ぼっこ」と読むボランティアグループ「ひなたBOOK」の発足は2007年。夕張市が財政再建団体入りし、廃止となった市立図書館に代わり、市保健福祉センター内に設けられた図書コーナーを一人で盛りもりする司書の平井由美子さんの頑張りに胸打たれた野尻千佳さんらが、「図書の整理や掃除など、できることがあつ

たら手伝います」と声を上げたことにより結成されました。以来、市図書コーナーをベースとし、学校、保育園、幼稚園、高齢者施設などで絵本や図書の読み聞かせ、紙芝居、手遊びなどを行っています。1月15日、冬休み中のゆうばり小学校の図書室に集まったメンバーは8人。同校図書室担当の工藤麻衣教諭や平井さんに指示を仰ぎながら、手慣れた様子で仕分けし、図書の傷み具合をチェックし、図書履歴と図書カードの照らし

夕張市在住

西田ひろ子さん(68)
野尻千佳子さん(72)

合わせを行っています。

「メンバーは60代から70代で、ほとんどが主婦。それぞれ車を運転して来ています」と代表の西田ひろ子さん。ひなたBOOK発足当時は市保育園の園長で、退職後、元同僚の野尻千佳子さんに誘われて参加しました。

「市が主催した読み聞かせ講座の参加経験者を中心に、あの人にも声を掛けてみよう」と広げていったのよね」と西田さん。「そう。みんな顔見知り」と野尻さん。

中には、子ども相手の読み聞かせや手遊びは未経験という人もいて、当初は勉強会を入念に行ったそうです。

「また来てね」が何よりの褒美に

ひなたBOOKの活動の中で特に注目されるのが、小学1〜3年生を対象とした、週2回（冬場は1回）、始業前約10分間の読み聞かせです。

同小学校は各学年1クラスで、読み聞かせは1回につき2クラス。各クラスに担当メンバー1人が出向きます。

「子どもは本来、本を読んでもらうのが大好き。始まる前静かになります。読み聞かせは集中力を養うのに最適で、落ち着きが出てきます。絵本だと長くても10分で終わりますから、ぜひ、ご家庭でも」と西田さん。

ひなたBOOKでは、その日の担当メンバーが、「この作品が好き！」という一押しを持参していきますが、思い入れが強いほど、児童の反応もよいとのこと。

「子どもたちが喜んでくれて、また来てね」と言ってくれたり、ハイタッチしてくれたら、ハイタッチしてくれたりするとうれしくて、頑張ろうという気になるんです」と野尻さん。

小学校の読み聞かせは、朝8時15分スタートとあって、家事との兼ね合いが気になるところ。

「絵本を読むのに約10分。車で自宅と小学校を往復する時間を入れても約30分。家を出る前に洗濯機のスイッチを入れ、帰って干すといった具合で、ひなたBOOKの活動



ゆうばり小学校での絵本の読み聞かせ風景

は生活の一部です」と西田さんはサラリと言います。

活動が生活の一部になっていくのは野尻さんも同じで、「今日のように、メンバーがまとめて活動した後の語らいがまた楽しい」とも。親睦が深まるにつれ、「掃除など作業だけなら」と条件付きで参加していた人の中から、「読んでみたい」とチャレンジ精神を発揮する人が現れ、周囲も勇気づけられるそう。

「夕張の子に本好きになってもらいたいという思いは、ますます強まっています」との西田さんの言葉に野尻さんも大きくうなずきます。

ボランティアグループ「ひなたBOOK」(ひなたぼっこ)

現在、メンバー約20人。問い合わせは下記へ。

◎事務局:夕張市図書コーナー
夕張市保健福祉センター1階
夕張市若菜3-19
TEL.0123-56-6601

その人のためにできることをして 笑顔になってもらえることが喜び

経験から得たものを
後輩たちに伝える

北海道大学農学部3年の李

澍さんは、親御さんの仕事の関係で中国東部の揚州から2010年に来日し、11年の東日本大震災を東京で経験。翌年、都内で開かれた被災地復興支援の縁日に中学生ボランティアとして参加し、以来、機会あるごとに被災地の復興支援ボランティアを行ってきました。

「初めてボランティアをした縁日で、ステキな大人の方に出会ったんです。縁日に来た子どもたちを楽しませることに懸



ボラ室でパソコンに向かい情報を発信する李澍さん

命になっていて、そうすることが復興支援につながると知り、ボランティアって、カッコいいと思いました」

そう話す李さんは、北大に入學早々、学生ボランティア活動相談室（通称・ボラ室）を訪ね、学生補助員になりました。学生補助員は相談員をサポートし、ボラ室登録会員へのボランティア情報のメール配信や、自らのボランティア経験をとおして得たもの・学んだことを後輩たちに伝える役割も担っています。

「ボランティアって、ハードル高いっつて感じている人には、全然そんなことないですよっつて言いたいです。

ちょっとした作業だとか、気軽にできることがたくさんあるのので、とりあえず話を聞いてみてください。そして内容を知って、興味をもって参加してもらえたらって思っています」と

李さんは、一言一言に思いを込めて話します。

出会った人との縁を大切に

さまざまなボランティア活動に取り組む李さんの motto は、「出会った人との縁を大切にすること」。

2016年8月、北海道を襲った台風10号により甚大な浸水被害に遭った南富良野町へは何度も足を運びました。「チャリティー団体が仕立てたバスに乗せてもらい、土・日や連休を利用して現地に行き、流木の片付け、ごみの処理、



台風被害に遭った南富良野町で濡れた写真の修復に参加

●札幌市在住
李澍さん(21)

家の引っ越しの手伝いなどしました。12月以降は、浸水で濡れてしまった写真修復のお手伝いに行きました。その時に出会った方々とずっと連絡を取り合っていて、先日も子どもたちの福祉施設のお祭りの手伝いに誘われました」と李さん。

2018年の胆振東部地震で被災した農家を支援するチャリティーマルシェにも、そうしたつながりのもと参加。安平町産の野菜や加工食品の販売を担当し、立ち止まってくれた人に自分の持っている知識の限りを尽くし説明をしたそうで、「農や食」を学ぶ学生の面目躍如といったところです。

子ども好きの李さんは、「ピュアなリアクションに、いつも心洗われます」と言い、各所が主催する子どもたちの学習支援にも参加しています。

「研究論文に取り組んでいるので、他のことにさける時間は限られますが、人と話すことが好きで、喜んで顔をみるとうれしくなるので、ボランティアは続けます。自分が行けないときは、後輩や知

り合いに連絡して行ってもらいます」と話す李さん。ボランティアネットワークの広げ方も、後輩にしっかり伝授しています。



右／来室者みんなで語らうボラ室は、いつも明るい雰囲気（※画像は北大HPから転載）



左／ボラ室入り口

北海道大学学生ボランティア活動相談室

相談員（ボランティアコーディネーター）：5人（各開室日1人が担当）、学生補助員：7人（当番制）、会員登録数：約500人。相談員と学生補助員が、ボランティアに関する相談に応じ、主に学生向けのボランティア活動（話し相手、学習支援、イベント協力など）の紹介を行っている。他大学の学生や専門学校生にも対応。

国立大学法人北海道大学 高等教育推進機構1階N109
札幌市北区北17条西8丁目

TEL.011-706-2119 FAX.011-727-5146 E-メール hokubora@jimu.hokudai.ac.jp

◎開室曜日・時間／月・水・金、15時30分～18時30分（祝日除く）

ボランティア活動事例⑤ 動物愛護

保護した犬や猫をケアして暮らし ボランティアで訪問セラピーも

捨てられた犬や猫の 保護の輪を広げる



脳障がいので歩けない兄弟猫のそばに集めた鹿内千夏子さんとその家族

※ 動物愛護センター…動物愛護の啓発活動と引き取り手のいない犬や猫などの処分をする施設として自治体が設置。

「身近な犬や猫のために自分を役立てよう」と決意した鹿内さん

北広島市内でトリミングサロンを営む鹿内千夏子さんは、2012年から個人で「Lucky Star(ラッキースター)」という活動名を掲げ、保健所や動物愛護センター(※)などから、高齢のため引き取り手がなかったり、早急なケアが必要な犬や猫を引き取って自宅で保護し、里親探しや看取りを行ってきました。

「もともとは野生動物を保護する仕事を志望していたんです。カナダに語学留学した際、犬や猫の保護施設でトリミングの手伝いをし、考えが変わりました。」と鹿内さん。「身近な犬や猫のために自分を役立てよう」と決意した鹿内さんは、帰国後、動物病院で働

きながら犬や猫についての知識を深め、トリミングの学校で学んで資格を取り、トリマーとして生計を立てつつ、逼迫した状況にある犬や猫の保護活動に励んでいます。犬や猫が高齢であったり、病気があったり、障がいがあったりすれば、世話に時間を要し、医療費もかさみます。鹿内さんは、連携している動物病院やボランティア仲間の協力を得て保護活動を行ってきましたが、基盤の充実を図るため2018年10月にラッキースターを法人化。運営

費はオリジナルカレンダーやグッズの販売などで捻出しています。

過去は苛酷でも 保護され幸運の星に



上/補助輪を着け駆け回るイチゴちゃん 下/訪問セラピーの様子(場所:社会福祉法人いしかり福祉会 ケアハウスりよくえん)

「この子は公園に捨てられていたんです。動けない状態です。褥瘡だらけでした。市民の方が保健所に連れて行ってくれましたが、尿毒症で死にかけ、即入院。退院したところで、うちで引き取ることに

今取材時、家族は人間1人、犬6匹、猫12匹。元気に駆け回っている犬もいれば、ゆっくりゆっくり歩く猫も。治療中だったり、ハンディキャップのある犬や猫もいます。「トラブルがないよう目を光らせていますが、関係性をどう築くかは犬や猫たちに任せています」と鹿内さん。

「病気を持っていたり、皮膚に毛がない状態だったりするこの子たちのことを、かわいそう」と言われることもありますが、どんな状態でも生きることだけを考えている姿をかわいそうと思うことはありません。必死でケアして、こんなに変われることを発信し、動物を飼う責任を自覚していただくことにつながればと思います」と鹿内さん。

2017年暮れに仲間入りした小型犬のイチゴちゃんは推定7歳。下半身不随ですが、滑りのよい洋服を身に着け室内を動き回っています。

「この子は公園に捨てられていたんです。動けない状態です。褥瘡だらけでした。市民の方が保健所に連れて行ってくれましたが、尿毒症で死にかけ、即入院。退院したところで、うちで引き取ることに

北広島市在住
鹿内 千夏子さん(39)

になりました」と鹿内さん。

イチゴちゃんは、鹿内さんによる心身のケアとおもちゃを使ったリハビリですっかり元気になり、ラッキースターが月1回ボランティア活動として行っているケアハウス(軽費老人ホーム)への「訪問セラピー」の欠かせないメンバーとなっています。

「私を必要としてくれてこの子たち(犬や猫)に支えられています」と笑顔で話す鹿内さん。保護している犬たちを散歩に連れて行ってくれる人、保護された犬や猫の里親になった人、看取り覚悟で預かりボランティアをしている人たちも、きつと同じ思いなのでしよう。

なお、個人宅ということもあり、見学・面会の対応は困難とのこと。インターネットを活用し情報を発信しています。

一般社団法人ラッキースターに関するアドレス

- ホームページ
<http://luckystar.sakura.ne.jp/wp/>
- ブログ
<http://renkanpokotan.blog.fc2.com/>
- ツイッター
<http://twitter.com/luckystar111222>

マイカーを活用して 買い物や通院を支援

同窓会がきっかけで
「微助人倶楽部」の会員に

「趣味は旅行とガーデニング。家庭菜園も作っています」とにこやかに語る田畑博さんは、現在68歳。住宅関係の団体職員として勤め上げ、65歳で退職するまでの数年間は公的団地の管理業務を担当しました。在職中から石狩浜の海浜植物の保護や植物によるまちの美化などのボランティア活動を続けていた田畑さんが、札幌微助人倶楽部（以下、微助人）を知ったのは2017年のこと。高校の同窓会で知人



札幌微助人倶楽部事務局で語る田畑博さん

が差し出した「NPO法人札幌微助人倶楽部」と記した名刺が、新たな活動に導きました。「趣旨に賛同し、早々に事務局に足を運びました。趣味や地元でのボランティア活動の時間を大切にしたいので、両立できるか尋ねたら、『できますよ』と言われ、その場に入会しました」と田畑さん。

微助人は、「介護保険などの公的サービスだけでは足りない部分を、お互いに助け合おう」との趣旨で活動する会員の有償ボランティア団体。家事援助、介護・介助、外出・通院支援、育児サポート、パソコン救援などのサービスを有償で提供しており、会員はサービスを受ける側にも、サービスを提供する側にもなります。

料金体系は、サービス受給会員が事前購入したチケットで支払う（1時間当たり700円＋交通費）方式で、

石狩市在住
田畑 博さん(68)

提供会員は受け取ったチケットの換金が可能。その際、700円券1枚につき500円を受け取り、200円が事務局運営費となります。

悩みや心配事を理解し きめこまやかに対応

田畑さんが自らの活動として選んだのは、マイカーを活用する移送サービス（※）。

「高齢の方や病気の方が、買い物や通院時の移動のことで

困っているという話をよく耳にします。車の運転はいつもしていることですから、すぐにお手伝いできると思っていました」と田畑さん。

かつて公的団地の管理業務を担当する中で、高齢化、孤立化を痛感した田畑さんは、福祉や防災について学び、防災士、福祉住環境コーディネーター、福祉用具専門相談員の資格を取得。高齢者の悩みや心配事を理解し、体の不自由な人の介助の仕方も習得しています。

「2017年11月に活動を始め、週4日をめぐりに月々金で依頼を受けています。事務局の配慮で自宅から近い札幌市の北区、西区、手稲区を主に担当していますが、南区に住む方を札幌中心部までお連れすることもあります。車の乗り降りのお手伝いは丁寧で、車中での会話は楽しい話題を心掛けています」と田畑さん。

吹雪のときこそ移送サービスが一層有意義に。歩行に不安がある依頼者を玄関から介助し、車に向かう

通院のための移送サービスでは、受給会員の希望により受診に付き添い（有料）、医師の言葉を手帳にメモ


NPO法人札幌微助人倶楽部

会員数:約1,600人、入会金:5,000円、年会費:なし。

札幌市中央区北5条西6丁目1-23
北海道通信ビル8階
TEL・FAX.011-241-9228(月～金、10時～17時)
※事務局携帯090-8904-9228でも対応。
E-メール sapporobiscuit@rice.ocn.ne.jp

する役割を担うこともあるそうです。こうしたきめこまやかさが大きな安心感を与えているのは言うまでもありません。「喜んでもらえるとうれしいです。活動を通じて出会った方から学ぶことがたくさんあります」と田畑さん。

※ 微助人の移送サービスは福祉有償運送として国土交通省に登録。運転者は二種免許または普通免許十受講等が必要。要介護認定など所定要件を満たす会員が利用できる。料金はタクシー料金のほぼ半額。最初の2ヶ月までは3200円、以後1ヶ月増すごとに1200円加算され、現金で清算。

文・イラスト
伊藤千織 

Köln
大聖堂のある大都市
ケルン

科学と感性の医療で

目標は
「自宅に戻ること！」

「日常をとり戻す！」

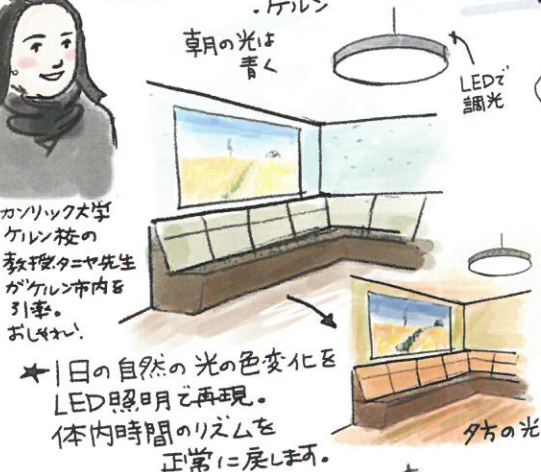
★認知症患者の高齢者特有の
視覚や心理を反映して環境づくり



カソリック大学
ケルン校の
教授タニヤ先生
がケルン市内を
引率。
おしゃべり!

★1日の自然の光の色変化を
LED照明で再現。
体内時間のリズムを
正常に戻します。

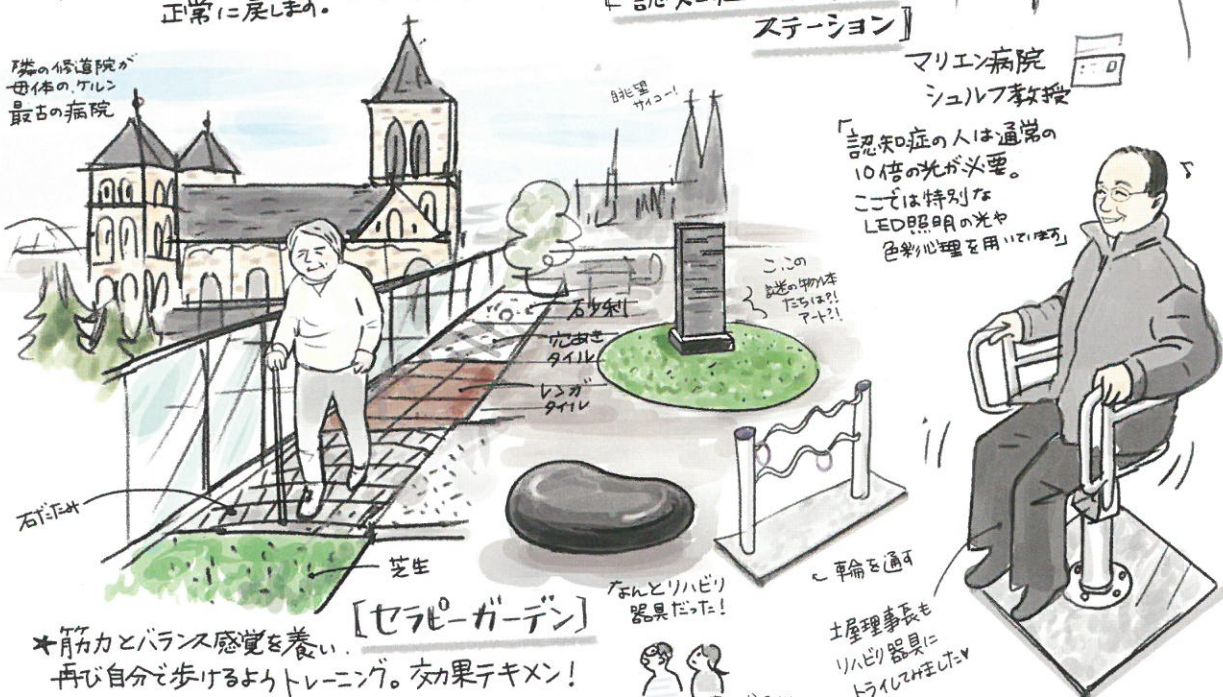
隣の修道院が
母体のケルン
最古の病院



「認知症・せん妄
ステーション」

マリエン病院
シュルプ教授

「認知症の人は通常の
10倍の光が必要。
ここでは特別な
LED照明の光や
色彩心理を用いてます」



【セラピーガーデン】

★筋力とバランス感覚を養い、
再び自分で歩けるようトレーニング。交感果テキメン!

財団30周年記念
「ドイツ高齢者福祉視察研修」

超高齢化社会へのヒントを求めて

ノーマライゼーション住宅財団の活動のひとつ、福祉全般の情報収集の旅「視察研修」も、創立からの30年間に、国内研修11回、海外研修14回を数える。各地の現場に赴き、施設や福祉の取り組みに参加者それぞれが知見を広め、レポートやその後の活動を通じて生かしていくことが目的だが、有識者や福祉関係者にとどまらない幅広い参加者層も特徴だ。

ドイツへの4年振りの海外視察研修に、筆者も初めて参加した。テーマの「ドイツの高齢者福祉」は、超高齢化社会を迎える日本にヒントを与えてくれるかもしれない。期待が高まる。

「自宅に戻す」「普通の生活をする」

ドイツ西部の大都市ケルンと、国境沿いの古都アーヘンを中心に、訪れた場所は、大病院の緩和ケア病棟、カソリック系病院の高齢者・認知症のケアステーション、特別養護老人ホーム、高齢の精神障がいのある在宅支援センターやデイケア、市街地の都市計画視察など。さまざまな切り口と老後の住まい方を垣間見た。

ドイツのプロテスタントというイメージが強いが、カソリックの信者も多く、教会系の運営による病院や福祉施設も多い。また「宗教税」と呼ばれる制度があり、その中から医療・福祉事業に交付されているという。

高齢者
ドイツ福祉視察研修

★下町の古いホテルを
改修

ORANIENHOF

人生いろいろあつけど...
皆といっしょに
「ふつうに暮らす！」



現在35~90才 84人が暮らす。



（左） 韓国30周年記念 福祉視察旅行団 1泊1日行程

海外に
おじゃま
しませう！



★いつも誰かがかいてくれる！
アットホームな雰囲気。
手づくりアートがあちこちに。

★アルコール・薬物依存症の施設と
一般の老人ホームが併設。
ここでは差別しないで
誰でも入れる（ホームレスでも）



Yokoso!

★4Fは依存症の
方々のフロア。天窓もあり
青空がゴッド。
薬も処方される。

施設長の
マリオンさん
ソーシャルワーカー
スザンヌさん
明るい！
やさしい！

Aachen
カール大帝ゆかりの
古都・アヘン



カソリック大学
アヘン校教授
リアーネ先生
福祉のスペシャリスト！

★民営（カソリック系）の
特別養護老人ホーム
抜き打ち評価でも常に良好。
ドイツ全土に
展開しています。



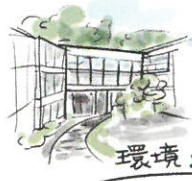
生活の質をていねいに
「おだやかに快適に
暮らす！」



介護よし！
サービスよし！

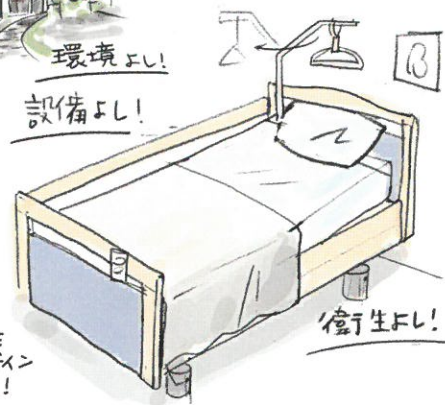


食事よし！



環境よし！

設備よし！



衛生よし！

★介護用品も
いろいろグッドデザイン
さすがドイツ！



★施設長のケリッシュさん
日々のことから、ビジネス的
側面まで全体に目くばり。

★本誌P.14~15「福祉視察研修」レポートと併せてお読みください！

視察先で繰り返し耳にしたことばが、利用者へ「自宅に戻す」「普通の生活を」。そのためのケアやリハビリであり、またそれらをサポートするためのシステムや環境、人の知恵と手という印象だ。空間づくりに、強く徹底した「質」の追求を感じる。

生活の質と人間の尊厳を守る

もう一つ耳にしたのが「ここには誰でも入ることができる」だ。薬物やアルコール依存症の人と一般の人が同じ屋根の下で暮らす老人ホームは、ドイツ国内でも珍しい取り組み。依存症の背景には貧困などの社会問題が横たわっているが、どのような人であっても差別なく（たとえホームレスであっても）人間らしい生活の質を追求する権利がある、という意識が浸透しているようだ。個を尊重しながら、それぞれが繋がる社会。高齢者や罹患者、障がい者、社会的弱者に対するまなざしは、日本のそれとは何かが違う？

...という疑問を持ち帰った帰国後、ドイツ社会の基本大原則は「人間の尊厳は不可侵」である、と知った。なるほど！

外の世界を見ることは、今いる世界を照らし出すこと。日本には日本的な福祉や暮らしのあり方がきつとある。もっと学ばなければ！ そんな宿題を持ち帰った有意義な旅であった。

ドイツの

高齢者医療・福祉現場に学ぶ

公益財団法人ノーマライゼーション住宅財団評議員

忍 博次



ノーマライゼーション住宅財団は昨年30周年を迎えた。それを記念してドイツの視察旅行(2018年11月)を計画し、視察先は同行の加藤洋子教授(帝京科学大学)によって、勤務する大学が学術交流しているドイツのカンリック応用科学大学との間で調整して頂いた。訪問先は高齢者の医療・福祉の実践現場である。以下、直感的であるが筆者の目で見えた感想である。

一、個人のニーズに応じて支援を示さないのに気が付いた。

アーヘン市で施設の名称表示がないのに気が付いた。日本では病院や福祉施設はどこでも看板や案内板で所在を明示している。それが普通であり疑問を持たない。看板がなければ却って不親切だと思う。ドイツでは看板を掲げることを許さないという。恐らく病气や障がい kategoryライズしてラベルを張ることがステイグマを強化するであろうことを危惧

ケルン市マリエン病院入口



二、病院の入院生活は「特別な空間でなく、ドイツの普通の生活環境と同じ生活の質を維持すること」

しているであろう。精神障がい者の在宅支援センターで「センターの訪問看護を近隣に知られたくない人がいる」という説明があった。日本でも同じ話を聞く。地域社会の偏見を意識しての施策なのであろう。



1. 病院屋上。土の道で裸足歩行ができる。
2. 屋上には簡単なリハビリ機器も設置。
3. 廊下の壁にも風景画。壁の中には動作測定器が埋め込まれている。
4. 大きな風景画。コンピュータ制御で入れ替る。

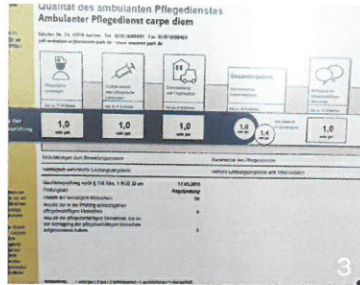
面に取り入れれたり、広くない屋上だが簡単な土の道を作って裸足歩行や簡単な機器で機能回復の訓練もしている。更にこれから廊下の壁に動作測定器を装置して日常動作を測定し、脳の働きとの関係を研究したいともいう。

自然の豊かさがなければ人間の健康は保てない。自然環境を大切に、人工環境にも自然環境を取り入れる。そしてここで生活してもドイツ家庭の普通の生活環境を維持し生活の質

を保つ。それがノーマライゼーションだとの信念が伺えた。

三、予告なしの監査、第三者評価で介護の質を維持

アーヘン市の民営介護支援施設(わが国の特別養護老人ホームに当たる)を訪れた。日本も同じだが設備もサービスの提供も国の定めた基準に則って運営しているという。従って年に1から2回、市や保健所の抜き打ち監査がある。とくに厳しいのは職員の半数は介護の専門職でなければならずその維持に苦労をしているという。経営も合理化し、食事、掃除、営繕などは法人の中に別に会社を組織し、無駄を省いてその分、介護の質を上げるよう努力しているとのことであった。また最近施設入所に至る前に、地域の資源(デイケア、ショートステイなど)を利用し、在宅に努力し、在宅福祉を基礎に施設福祉を考えるようになってきている。この施設も5つのホームをグループホームやアパートに切り替え、地域移行をしているという。幸い施設の評価は高く就職希望者は多いが介護専門職は外国人にも門戸を広げているという。帰りに第三者評価票が入り口近くに張ってあるのが目につ



1.アーヘン市の民営介護支援施設。屋上からの施設風景。 2.同施設カフェレストラン。家族や友人達と飲食しながら憩う。 3.同施設入口に貼られている第三者評価証。

いた。「医療・介護・認知症入居者への対応」「日常の世話と状況」「食事・家事」「入居者へのアンケート」と評価項目はカテゴリー化されており、すべてに良好であった。

四、ガン患者へーボランティアとの協働ケア

ケルン大学医学部付属病院の緩和病棟に訪れた。1983年ドイツで初めての開設だという。ベット数は15床だがガン患者の治療、研究、臨床教育に効果を上げているという。私は緩和病棟はホスピスと同じと考えていた。平均10日の入院と聞いて日本で考える緩和病棟と違うということに気が付いた。

緩和病棟には一般病棟、外来、その他から送られてくる。激痛や精神的パニック、または不安定などの症状に対し、それを和らげ、病状を安定させ、QOLを維持するのが目的であるという。治療はいろいろな専門の医師が連携協力し、集中的に苦痛を除去することに努力する。治療が成功し苦痛が収まれば、一般病棟やホスピスに移行する。入院期間は短い。大部分の患者は末期のガン患者であるという。

心理部門次長のモニタークさんにより、末期のガン治療を外来で在宅治療、家族支援を行っている実践の紹介があった。専門職2人とボランティア35人がチームを組み、在宅医療で患者に寄り添い、家族の不安や悲しみを和らげる支援を行っている。地域で



アーヘン市の在宅支援センターにて。

は話し合いの場づくり、支援の輪の地域組織化を進めているとのこと。現在ドイツでは350の緩和病棟があり、ホスピスは400位。専門職と協働するボランティア組織は1000位あるのではないかと。わが国では病院独自で患者や介護者の話し合いの場を設けているところはあがるが、ボランティアとの協働はすくないのではないかと。専門的対人サービスに対するボランティアの参加は研修が重要と強調していた。

五、patientとpatientとの接遇

アーヘン市の在宅支援センターにもやはり名称表示はなかった。作業療法士のドリン・ケラーさんはここでは精神障がい者を対象にデイサービスや作業療法、訪問看護、在宅介護を行っているが、ここを利用する人をpatient(病人、患者)

としてではなく、client(利用者、お客さん)として受け入れていると強調する。デイサービスは地域の普通の住民も利用しており参加を拒まない。利用者は隣の病院精神科から50%であとは地域の人であり、作業療法士2人、介護士1人の職員で対応。費用は医師の処方を受けている人は医療保険、介護の認定を受けている人は介護保険の適用になるがその他の人は実費を負担(1日3ユーロ、食事2ユーロ、コピー50セント)しなければならないという。

在宅介護や訪問看護、救急医療は治療を終えて退院しても社会生活に困難や不安を抱えている人に対する支援である。200人のクライエントに30人の看護師と介護士が対応しているが、援助の内容は医師の処方や介護度によってさまざまである。2年前に介護度は5段階に変わり給付額も変更になった。日本の制度とドイツと違うところはドイツでは家族が介護しても専門機関の介護(現物給付)の約半分の現金給付が受けられる。また日本の介護保険給付は高齢者対象であるが、ドイツでは介護

六、終わりに

訪れたケルン市とアーヘン市は第2次大戦で市街地の9割が空爆により破壊されたと聞く。今は街並みもそして歴史ある大聖堂も元通り復興し、世界遺産に登録されている。ドイツ国民の底力を見る思いであった。福祉の思想も高齢者や障がい者の支援の必要性がステイグマや差別に結びつかないよう最大の配慮がなされていた。そこにはナチス・ドイツによってなされた精神障がい者殺害の深い反省のあることが伺われた。ドイツはプロイセンのビスマルク宰相が労働者の社会保険(1883)を世界最初に制度化した国であり、福祉先進国である。わが国の介護保険もドイツの制度をモデルにした。浅い経験であったがドイツの文化の一端に触れ、学び甲斐のある旅であった。



ケルン大聖堂にて参加者一同。



優れたアイデアをより多くの人に知ってもらうため、例年、本コンテストの入賞作品をさっぽろ地下街で展示公開しています。今回は1月12日から14日まで、オーロラプラザの広いスペースに見やすいよう工夫し展示しました。

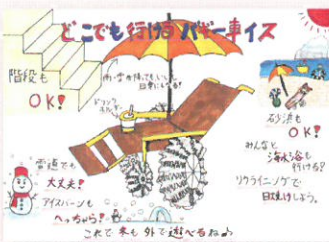
当財団では、毎年、小中学生を対象に「安全・快適アイデア」コンテストを実施しています。今回は道内と東京都合わせて20校（小学校5校、中学校15校）および個人から548作品の応募がありました。厳正な審査により、小学生の部・中学生の部それぞれの最優秀賞、優秀賞、優良賞、佳作、奨励賞が決定しましたので、ここに紹介いたします。（記載の学校・学年は応募時現在）

第23回 小中学生による 「安全・快適アイデア」 コンテスト 入賞者発表

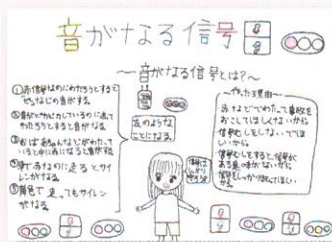
入賞作品は当財団のホームページでもご覧いただけます。

小学生の部

優秀賞[2作品]



「どこでも行けるバギー車イス」
札幌市立西岡北小学校6年
外山日陽さん



「音がなる信号」
札幌市立新光小学校5年
森下汐莉さん

「アッシュユ君」

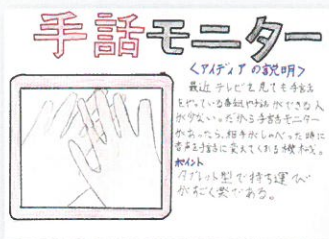
札幌市立定山溪小学校5年
多田樟太郎さん



最優秀賞

中学生の部

優秀賞[4作品]



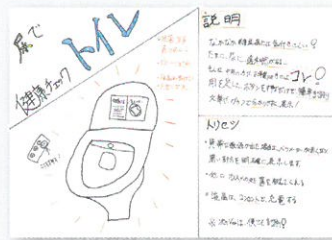
「手話モニター」
旭川市立神居東中学校3年
岡 大志朗さん



「いつも快適 温度調節カーテン」
旭川市立愛宕中学校2年
木村仁子さん



「メディカル自販機」
札幌市立常盤中学校3年
二階堂紅花さん



「尿で健康チェックトイレ」
旭川市立東陽中学校3年
栗田凌佑さん

最優秀賞



「栄養管理ロボット」

幕別町立札幌内中学校2年 輿村風花さん

審査委員長 講評

北海道デザイン協議会

理事・名誉会長 大阪 克彦

世の中の健康に対する意識の高まりを反映した応募が増えています。今回は、中学生の部最優秀賞の「栄養管理ロボット」をはじめ、優秀賞の「メディカル自販機」「尿で健康チェックイレ」など、実現可能な健康に関するアイデア作品が上位入賞となりました。

小学生の部最優秀賞の「アツシユ君」は、強い重力を作り出して物を吸い込むアイデアですが、審査委員に物理学の専門家がいないこともあり議論を重ねました。その結果、「ユニークな視点」を高く評価しました。

胆振東部地震の影響からの防災グッズや超高齢社会を踏まえたアイデアにもすばらしい作品がありました。次回の審査でどんな作品と出会えるか、今から楽しみにしています。

審査委員

(敬称略/順不同)

北海道科学大学

名誉教授 菊地 弘明

北海道社会福祉協議会

福祉人材部部長 野村 宏之

札幌市社会福祉協議会

常務理事 瀬川 誠

伊藤千織デザイン事務所

代表 伊藤 千織

北海道デザイン研究所

所長 佐藤 進

北海道新聞社

くらし報道部部長 嵯峨 仁朗

優良賞 [3作品]



デルタスクール4年 朝倉嘉音さん



札幌市立新光小学校5年 上田ののはさん



札幌市立新光小学校5年 葛西日和さん

■佳作 [6作品]

- デルタスクール1年 降旗友奏
- デルタスクール4年 ジェイムスン オリビア彩耶
- デルタスクール5年 岡崎 律、塩浦すみれ
- 札幌市立新光小学校5年 今 千織、森本楓佳

■奨励賞 [5作品]

- デルタスクール1年 チェン クラリッサ絢
 - 八雲町立浜松小学校3年 田上華倫
 - 札幌市立新光小学校5年 小山内大徳
 - 札幌市立豊園小学校5年 畑中実結
 - 伊達市立星の丘小学校6年 黒田大智
- (敬称略・順不同)

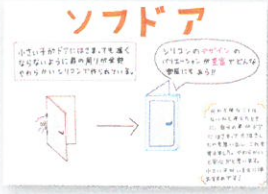
優良賞 [8作品]



旭川市立神居東中学校3年 森 野乃花さん



旭川市立神居東中学校3年 若林笑見さん



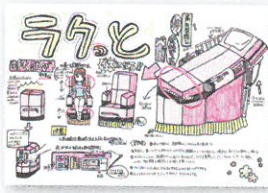
旭川市立東陽中学校3年 駿河静佳さん

■佳作 [14作品]

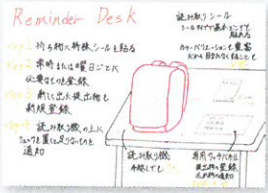
- 旭川市立愛宕中学校1年 小林りな、佐々木真優、佐竹琥羽
- 旭川市立神居東中学校1年 有働亮太
- 旭川市立愛宕中学校2年 櫻田采芽、鈴木凜音
- 厚岸町立真龍中学校2年 稲葉小絵
- 旭川市立神居東中学校3年 阿部花音、菅原未空
- 旭川市立東陽中学校3年 松居優心
- 釧路町立富原中学校3年 貫塩永二、米岡美佐紀
- 壮瞥町立壮瞥中学校3年 木村美繪
- 北海道龍谷学園双葉中学校3年 久保陽嗣

■奨励賞 [24作品]

- 旭川市立愛宕中学校1年 向井悠花
 - 旭川市立神居東中学校1年 黒住萌桃
 - 別海町立上春別中学校1年 阿部瀧獅
 - 足寄町立足寄中学校2年 葦島 望
 - 厚岸町立真龍中学校2年 池田葉純
 - 岩内町立岩内第一中学校2年 多賀文哉、福澤栞打
 - 岩内町立岩内第二中学校2年 青木陽夏、堀 輝星
 - 札幌市立厚別南中学校2年 高橋美里
 - 幕別町立札内中学校2年 青木優奈
 - 旭川市立神居東中学校3年 河野優輝
 - 旭川市立東陽中学校3年 市川聖花、服部亜子、松藤那奈
 - 厚岸町立真龍中学校3年 市澤昇太
 - 砂川市立石山中学校3年 作田 玲、皆上祐嘉
 - 壮瞥町立壮瞥中学校3年 加藤 葵
 - 釧路町立富原中学校3年 井上 楓、佐藤祐弥、福德吏悠空
 - 本別町立勇足中学校3年 二瓶由理亜
 - 北海道龍谷学園双葉中学校3年 小林円佳
- (敬称略・順不同)



旭川市立東陽中学校3年 増田初美さん



北海道龍谷学園双葉中学校3年 児玉かのんさん



旭川市立東陽中学校3年 長岡 空さん

※ここに掲載のアイデアの無断使用を禁じます。お問い合わせは当発行所(P2)までお願いします。

障害者通所施設を地域に開放！ 札幌わらしべ園苗穂事業所で「もちつき」

1月14日、「札幌わらしべ園苗穂事業所」(札幌市東区)が、地域住民に参加を呼び掛け、同事業所内で「もちつき」が行われました。その様子と注目を集める同事業所の取り組みを紹介します。

取材・文／大藤紀美枝

地域交流イベントに 子どもや保護者も参加

札幌わらしべ園苗穂事業所は、2018年4月の開設以来、施設の一部を一般住民に開放しており、同年8月にはユニークな取り組みをスタートさせました。

その名は「あごら」わらしべ。「あごら」は、人の集まる所を意味するギリシャ語に由来します。主に祝日にフ

リーマーケット、秋祭りなど「地域交流」を目的としたイベントを開催しており、このたびの「もちつき」もその一つ。通所している利用者や施設職員に限らず、誰でも無料で参加できる趣向です。

事前告知が功を奏し、地域の子どものその保護者らが続々訪れ、開始時刻の午前10時30分には会場がほぼ満員に。石臼と杵でもちをつくとあって、みんな興味津々。子ども

たち、そして利用者が次々に杵を手にし、子ども、保護者、利用者、ボランティアが入り混じって、つきたてのもちを丸めていきました。

多目的スペースで正午からスタートした「地域食堂」(※)では、ハヤシライスと共に雑煮がふるまわれ、格別の味わいが満喫。各テーブルで会話が弾みます。

「もちつきには30人ぐらい集まりました。地域の方にも楽しんでいただき、私たちもうれい입니다」と川本明良施設長。

同事業所に福祉分野を専攻しインターンシップで来ている学生たちももちつきや地域食堂を手伝っていました。催しを通じ貴重な経験を積んだことでしょう。

快適空間を無料開放 自習や図書閲覧も

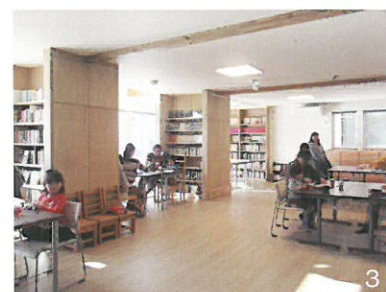
札幌わらしべ園苗穂事業所では、障がいのある人もない人も、子ども高齢者も集う居場所づくりを念頭に置いて木造2階建ての施設を建設。1、

2階とも、開放感のある広々としたスペースにテーブルとイスをゆつたりと配置しています。

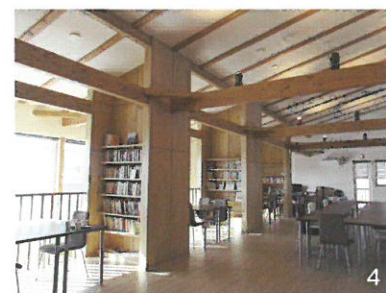
また、柱の両面を利用した本棚には、小説、児童書、写真集など、多彩なジャンルの図書が並び、1、2階合わせてその数約500冊。閲覧はもちろん、借りて読むこともできます。

「1階は、日中、通所してこられた利用者さんがグループ活動をとおして訓練や学習に取り組む場となっています。2階は、一般の方に開放していて、自習スペースでいつも宿題をしている近所のお子さんは、もはや顔なじみです」と川本施設長は語り、「お気軽にお越しください」と、読書や学習の場としての利用を呼びかけます。

図書の貸し出し、自習スペース、いずれも無料で、利用時間は平日の午前10時から午後5



3



4

3.開放型施設の1階で地域食堂を開催
4.開放型施設の2階も快適な自習・読書空間

障害者通所施設 札幌わらしべ園苗穂事業所

札幌、大滝、浦河で事業展開し、人としての自信を取り戻させ、自己を肯定的に捉える力を養う訓練法を実践する社会福祉法人わらしべ会(北海道)が2018年4月に苗穂に開設。現在、高次脳機能障がい、知的障がいなどのある人、7人が通所している。施設を一般住民にも開放。

札幌市東区苗穂町3丁目2-35
TEL.011-776-7981 FAX.011-776-7982
E-メール sawarasibe@cotton.ocn.ne.jp

時。自然光と木の温もりを生かした空間は、誰にとっても快適。施設職員や利用者や挨拶を交わし語らうことで、互いを得るものは計り知れません。

※ 地域食堂…札幌わらしべ園苗穂事業所では、ほぼ毎月開催。昼食を中学生以下100円、高校生以上200円で提供。誰でも利用できる。



1



2

1.札幌わらしべ園苗穂事業所
2.参加した子どもや利用者が次々にもちつき

公益財団法人「ノーマライゼーション住宅財団」の活動をご紹介します

小誌『WITH LIFE』を発行している当財団は平成元年設立、公益に資する法人として、「ノーマライゼーションの理念に基づき、高齢者や障がい者にとっても安全で安心して快適に暮らせる住生活の整備・向上を通して、すべての人が生きがいをもって生活できる社会づくりと、社会福祉の増進に寄与する」ことを【目的】に、主なものとして下記の【事業】を行っています。

- 当財団では、活動理念・趣旨にご賛同いただける方へ、「賛助会員」の入会をお願いしております。
- 当財団へのお問合せは、本号2頁記載の連絡先へお願いいたします。
- 当財団の詳細につきましては、ホームページ (<http://normalize.or.jp/>) をご覧ください。

1 広報誌『WITH LIFE』の発行

生涯、快適に暮らしたいをテーマに、ノーマライゼーションの理念と実践を紹介する当財団の広報誌です。ノーマライゼーションを実践されている方々による具体策、また、関連事例、関連情報源、福祉住宅の実例などの役立つ情報を紹介しています。

■本号通巻49号。バックナンバーを無料提供いたします。



2 助成金により福祉住宅の建築を支援

高齢者や障がい者にとっても安全で快適に暮らせる住宅、また将来身体機能が低下しても安心して生活できる住宅として新築したりリフォームした建築主、およびグループホームや高齢者向けアパートなどの福祉小規模集合住宅の建築主から応募を受け、審査のうえ今後の参考に資する施工物件に対して助成金を給付し、また特に優れた物件については設計施工業者さんを表彰させていただきます。

■本年度の募集要項（概要）は左記の通りです。詳しくは当財団までお問合せください。

- 募集期間 5月1日～11月30日
- 応募方法 当財団ホームページから所定申請書をダウンロードして必要事項記入・提出
- 助成金 一件5万円～30万円（総額300万円範囲内）

3 福祉住宅建築助成事例集『ふれあい』発行

前項の助成対象物件の中から、さらに選考された事例を、写真や図面つきで紹介しています。専門家のアドバイスや、工夫した点、実際暮らしてみた感想なども綴られています。福祉住宅として新築・リフォームを考えている方などにお役立ていただいております。

■通巻29号。バックナンバーを無料提供いたします。



4 小中学生による「安全快適アイデア」コンテスト

お年よりや障がいのある人が安心して

て快適に生活できるための、身近な道具・用具、また安全に外出を楽しめる環境づくりなど、様々な「安全・快適アイデア」を小中学生から絵と文字で提案してもらいます。

■昨年度（第23回）入賞作品は本号16頁に掲載してあります。

■本年度募集要項（概要）は左記の通りです。詳しくは当財団までお問合せください。

- 募集期間 6月1日～10月31日
- 応募規格 画用紙（八つ切り）
- 応募方法 当財団ホームページから所定の応募票をダウンロードして必要事項を記入し、作品の裏面に添付

5 福祉事情に関する情報収集及び提供

各地の福祉施設や福祉事情などを視察し、小誌『WITH LIFE』でレポートを発表し、また「報告集」を発行しています。

■昨年11月に実施した「ドイツ高齢者医療・福祉実践現場」視察レポートは本号14頁をご参照ください。

また、本視察の報告集を無料提供いたします。





生涯、快適に暮らしたい。